

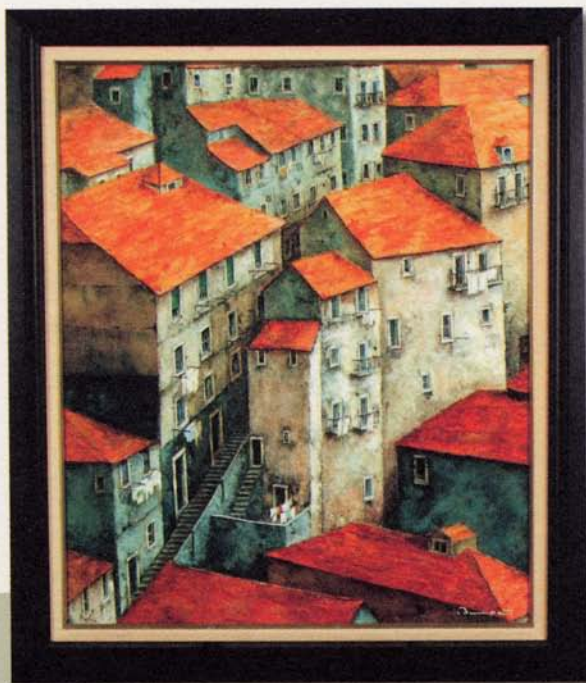
高橋 文平

第1回生

ポルトガルの風景に心奪われ

Profile

上智大学外国語学部ポルトガル語学科卒業。40歳から油、水彩画を独学で始める。ポルトガルの風景を中心にヨーロッパを描く。近隣の「常滑散歩道」なども10数年描き続けている。



「ポルト」

ポルトガル北部の街「ポルト」。苔むしたオレンジ色の瓦屋根が連なる。細い坂道は決してきれいに清掃されてはいないけれど、汚さは感じない。朽ちた壁さえも心に優しく響く。そんな路地からはそこに暮らす「飾らない人々の暮らし」が感じられる。



「リスボンの市電」

細く曲がりくねった路地を、歩いている人に追い越されるくらいゆっくりと走る市電。子供達が「つかまり乗り」している。リスボンの風景にはなくてはならない人々の足「市電」。

絵画との出会い・・・

絵に対する興味は幼稚園の頃から。银杏などの落ち葉で貼り絵を作って園長先生に褒められたことが印象に残っている。小さな頃のいくつかの体験が油絵セットを買ったきっかけで蘇り永い間忘れていた絵の世界へ私を引きずり込んだ。

星城高校の後輩へ

一つのことをこつこつ続ける。ふと自分のまわりを見渡したとき焦りを感じてしまう時もあるかもしれないが、一生懸命頑張っていれば、必ず誰かがどこかで見ていてくれる。それが自分の好きなことだったら一番。



「1992年当時の校舎」

今は新しくなってしまった校舎。当時の学校生活や部活、友だちいろいろ思い出される作品。

「ほっ」とする景色に出会う

大学生の時以来20年振りに訪れたポルトガルの街。変わっていない街並。人々は楽しそうに、無理せず、気取らず、質素に一生懸命に生きている。「ほっ」とする。そんな暮らしが感じられる風景、街角を描きたい。スケッチブックを手にあちこち旅する。「ほっ」とする景色に出会う。「ほっ」として描く。思い出が残る。するとそこが自然と心に残る居心地の良い場所にもなる。